



第9回

日本医師会

赤い賞



かかりつけ医たちの奮闘

受賞者紹介



主催 日本医師会／産経新聞社
協力 都道府県医師会
特別協賛  太陽生命

赤ひげ大賞

目次

3 第9回「日本医師会 赤ひげ大賞」概要

4 祝辞 内閣総理大臣 菅 義偉

5 主催者挨拶 日本医師会 会長 中川 俊男

6 主催者挨拶 産経新聞社 代表取締役社長 飯塚 浩彦

7 協賛社挨拶 太陽生命保険株式会社 代表取締役社長 副島 直樹

8 祝辞 厚生労働大臣 田村 憲久

9 選考委員コメント

受賞者紹介 (順列は北から)

10 升田 鉄三 (北海道 礼文町国民健康保険船泊診療所)

15 藤井 敏司 (岩手県 藤井小児科内科クリニック)

20 鈴木 直文 (茨城県 慈泉堂病院)

25 伊藤 博 (石川県 伊藤病院)

30 梶尾 直美 (広島県 沖野上クリニック)

35 赤ひげ功労賞 受賞者

38 選考講評 日本医師会 常任理事 城守 国斗

39 第10回「日本医師会 赤ひげ大賞」推薦概要



第9回「日本医師会 赤ひげ大賞」概要

「日本医師会 赤ひげ大賞」は、公益社団法人日本医師会と産経新聞社が主催し、「地域の医療現場で長年にわたり、健康を中心に地域住民の生活を支えている医師にスポットを当てて顕彰すること」を目的として、厚生労働省、フジテレビジョン、BSフジの後援のもと、平成24年に創設(第6回より太陽生命保険株式会社が特別協賛)されました。各都道府県医師会から候補者を推薦していただき、選考委員の厳正な協議を経て、第9回「日本医師会 赤ひげ大賞」の大賞5名と、功労賞13名の受賞が決定しました。

- 主催** 日本医師会、産経新聞社
- 後援** 厚生労働省、フジテレビジョン、BSフジ
- 協力** 都道府県医師会
- 特別協賛** 太陽生命保険株式会社
- 対象者** 病を診るだけでなく、地域に根付き、その地域のかかりつけ医として、生命の誕生から看取りまで、さまざまな場面で住民の疾病予防や健康の保持増進に努めている医師。日本医師会及び都道府県医師会の会員で現役の医師(ただし、現職の日本医師会・都道府県医師会役員は除く)。
- 推薦方法** 本賞受賞にふさわしいと思われる方1名を各都道府県医師会会長が推薦
- 選考委員** 羽毛田信吾(昭和館館長、前宮内庁参与)
向井 千秋(東京理科大学特任副学長、宇宙航空研究開発機構特別参与)
檀 ふみ(女優)
ロバート キャンベル(前国文学研究資料館館長)
河合 雅司(作家、人口減少対策総合研究所理事長)
迫井 正深(厚生労働省医政局長)
釜范 敏(日本医師会常任理事)
城守 国斗(日本医師会常任理事)
鈴木 裕一(産経新聞社上席執行役員)
乾 正人(産経新聞社執行役員論説委員長)

内閣総理大臣 菅 義偉



この度、栄えある日本医師会「赤ひげ大賞」及び「赤ひげ功労賞」を受賞された皆様、誠におめでとうございます。支えてこられたご家族の皆さまにも心からお祝い申し上げます。

また、我が国では昨年来、新型コロナウイルス感染症との戦いが続いており、その最前線である医療現場で日々ご努力いただいております皆様に心から敬意と感謝を表します。

「日本医師会 赤ひげ大賞」は、地域で活躍されてきた医師にスポットを当て、地域医療の大切さを広める事業として創設され、今年度で第9回を迎えたと伺っております。

今回、受賞された皆様は、各々の地域において、地域に密着した医療を実践して地域医療を支えていただいている方々と伺っております。

長年にわたり地域住民の健康を支え続けている皆様の崇高な使命感と行動力は、まさに現代の「赤ひげ先生」であり、全国32万人の医師の鑑となる存在です。

そして、皆様の受賞は、全国津々浦々で地域医療に携わっていらっしゃる医師の方々の励みとなるものです。

人生100年時代の安心の基盤は「健康」です。それを支える上で、地域の方々にいつも寄り添い、頼りにされる皆様のような「かかりつけ医」の役割は非常に重要であると考えております。

政府としても、国民一人ひとりが、年齢にかかわらず、住み慣れた地域で活躍できるよう、「かかりつけ医」を中心に、身近なところで、医療・介護が切れ目なく提供される体制の構築を、中川会長始め日本医師会とも協力しながら進めて参ります。

そして、世界に冠たる国民皆保険制度を次の世代にしっかりと引き継いで参ります。

地域の皆さんの安心・安全につながる地域医療をしっかりと確保していくことをお約束するとともに、皆様方のますますのご活躍をお祈り申し上げて、私の挨拶といたします。

日本医師会 会長 中川 俊男



昨年来、新型コロナウイルス感染症が世界中で猛威をふるっておりますが、日本医師会では執行部一丸となって、新型コロナウイルス感染症ばかりでなく、地域医療を守る医療機関の危機的状況への対応などに邁進して参りました。

この新興感染症の登場によって、私達の生活様式及び働き方、学校教育のあり方など、各方面での大きな変化が起こり、我慢を余儀なくされる中で、医療が社会においてどれほど大切なインフラであるのかを、誰もが痛感した1年であったのではないのでしょうか。また、各地域において医療提供体制を守っていくことが、いかに重要であるかを感じた方も多かったと思います。

さて、この「日本医師会 赤ひげ大賞」は、地域医療の現場で長年にわたり地域住民に寄り添い地道に尽力されている先生方を「現代の赤ひげ先生」に見立て、その功労を顕彰することを目的として、平成24年に創設したものです。

「赤ひげ大賞」の名称の由来は、山本周五郎の時代小説「赤ひげ診療譚」にあります。黒澤明監督が映画化したことで、一般の方々にも親しまれていますが、この「赤ひげ先生」の实在のモデルは、江戸中期に貧民救済施設である小石川養生所で活躍した小川箎船と言われており、貧しく不幸な人々に寄り添い、身を粉にして働く頼もしい医師というイメージが受賞者にふさわしいと考え、命名しました。

第9回目となる今回は、5名の先生方を「赤ひげ大賞」に、13名の先生方を「赤ひげ功労賞」に決定いたしました。受賞者の皆様、誠におめでとうございます。

残念ながら、新型コロナウイルス感染症の感染拡大の影響で、第8回目について今回も一堂に会する表彰式を開催することはできませんでしたが、受賞された先生方はいずれも、各地域において献身的に医療活動に従事され、患者さんの信頼も厚い、まさに「現代の赤ひげ先生」としてご活躍されている方々ばかりであります。

全ての人々が安心して暮らせる、かかりつけ医を中心としたまちづくりの実現のため、日本医師会では今後も地域の医師の方々へのバックアップに全力で取り組んで参る所存です。

末筆ではございますが、改めまして、共催の産経新聞社、ご後援の厚生労働省、フジテレビジョン、BSフジ、特別協賛いただきました太陽生命保険株式会社を始め、本事業の実施にご尽力いただきました方々に、心より御礼申し上げます。

主催者挨拶

産経新聞社
代表取締役社長 飯塚 浩彦



「赤ひげ大賞」、「赤ひげ功労賞」受賞者の皆様、ならびにご家族の皆様、誠におめでとうございます。

平成24年に創設された「赤ひげ大賞」は、今年で9回目を迎えました。残念ながら、新型コロナウイルス感染症の拡大により、昨年に続き、皆様集まったの表彰式が開催できませんでした。そのような中でも、医療現場の最前線で地域住民の「かかりつけ医」として、日々奮闘されている皆様に感謝申し上げます。

昨年、新たに「赤ひげ功労賞」を設け、18名と今年13名の先生方を「赤ひげ功労賞」に、そして、昨年5名、今年5名の先生方を「赤ひげ大賞」に決定いたしました。いずれの受賞者も、地域住民の健康な生活を支えてこられた方ばかりで、まさに「現代の赤ひげ先生」たちです。

受賞者の中には、最高齢となる99歳の「赤ひげ先生」、第8回受賞者の古江増蔵先生と第9回受賞者の伊藤博先生もいらっしゃいます。先生方は99歳になった今もご活躍中です。「人生100歳時代」が叫ばれる中で、まさに現役で活躍し続けている医師です。

産経新聞社でも、誰もが100歳まで生きることが当たり前になる時代に備えて、4年前に「100歳時代プロジェクト」をスタートさせ、人生設計に関するシンポジウムやフォーラムの開催など、さまざまなプロジェクトに取り組んでおります。

多くの人が100歳まで生きられる時代を迎え、一人ひとりの人生設計も、社会の仕組みも、大きな変化を求められています。年齢を重ねてもいかに健康に、毎日を充実させて生きるか。われわれもさまざまな提言を行って参りたいと思いますが、申し上げるまでもなく、この健康な100歳時代を支えるのは、地域に深く根差した医療であり、その医療活動に携わる医師の皆様、医療関係者の皆様であります。今後とも皆様のご尽力を心よりお願いしたいと思います。

私ども産経新聞社は、報道機関として、日本の医療の充実、さらには国民の長寿と健康的な生活の一助となるべく、これまで以上に邁進していく所存でございます。今後とも、皆様方の一層のご支援を賜りますようお願い申し上げます。

結びになりますが、特別協賛をいただいております太陽生命保険株式会社様をはじめ、ご協力、ご尽力いただきました方々に、心より御礼申し上げます。受賞者の方々、誠におめでとうございます。

協賛社挨拶

太陽生命保険株式会社
代表取締役社長 副島 直樹



「日本医師会 赤ひげ大賞」を受賞された5人の皆様、ならびに「赤ひげ功労賞」を受賞された皆様、誠におめでとうございます。

2020年は新型コロナウイルス感染症の大流行という世界的な危機に直面し、現在も終息には至っていない状況が続いております。このような環境の中、医療の現場でひたむきにご尽力いただいている先生方に心から敬意を表するとともに、深く感謝申し上げます。

感染症拡大を受けて、オリンピック・パラリンピックをはじめとするさまざまなイベントやビジネスがリセットされ、日本国内においても緊急事態宣言が発令されるなど、社会は大きく変化しました。特にライフスタイルの変化による課題の一つとして、外出自粛などの行動の制限を要因とする社会的孤立が懸念されています。高齢化が進行する日本において、特に一人暮らしの高齢者が不安やストレスによって健康に悪影響を及ぼしていることが深刻な問題となっています。

また、新型コロナウイルス感染症のワクチン接種開始に伴い、感染症予防の効果及び副反応のリスク双方の正しい情報共有が医療現場では求められます。

社会的孤立、ワクチン接種の開始等に対する不安を持つ住民の心のケアも地域医療の重要な役割であると思います。そのような状況下、地域住民への理解が深く、信頼関係もある「かかりつけ医」の存在がますます重要になっていくと思われま。地域住民のすぐ近くにいる、いつでも頼りにできる先生がいるという安心感は、大きな心の支えであり、なくてはならないものとなっています。

一方で、私たちは生命保険会社として国民の医療に対するニーズを保障の面で支えていきたいという思いから、昨年9月には感染症に対する保障を提供すべく「感染症プラス入院一時金保険」を発売しました。

また当社は、「元気!長生き!100歳時代!」をテーマに、100歳時代に向けて元気と長生きを応援する取り組みを実施しております。地域に寄り添い、地域住民の健康を支える先生方のように、当社も人々の健康増進のお役に立てるよう、お客様の暮らしに寄り添った生命保険会社実現に向けて取り組んで参る所存です。

今後も地域医療の更なる発展につながることを願い、長年地域住民を支えてきた先生方を顕彰する「日本医師会 赤ひげ大賞」をより多くの方々に知っていただけるよう当社も微力ながら支援したいと考えております。

末筆ではございますが、受賞者の皆様と全国各地の赤ひげ先生のますますのご活躍と、日本医師会及び産経新聞社のご関係者の皆様のご健勝を心より祈念申し上げます。ご挨拶とさせていただきます。

「赤ひげ大賞」ならびに「赤ひげ功労賞」受賞の先生方、誠におめでとうございます。

厚生労働大臣 田村 憲久



この度、栄えある第9回「日本医師会 赤ひげ大賞」において「赤ひげ大賞」を受賞された5名の方々及び「赤ひげ功労賞」を受賞された13名の方々に対し、心からお祝いを申し上げますとともに、地域医療の現場で、長年にわたり貢献してこられた活動に、深く敬意を表します。

「日本医師会 赤ひげ大賞」は、病を診るだけでなく、地域に根差し、その地域のかかりつけ医として、生命の誕生から看取りまで、さまざまな場面で住民の疾病予防や健康の保持増進に努めている医師にスポットを当てた地域医療の大切さを広める事業です。

受賞者の皆様におかれましては、住民が安心して生活を送れるよう、それぞれの地域医療の現場で、地域に寄り添いながら、日夜取り組んでいただいていると伺っております。長年にわたり、住民を支えてこられた皆様は、住民に安心を与え、地域医療を豊かに育んでこられたかけがえのない方々であると思います。

地域医療には、病気の治療だけでなく、その地域の人々のさまざまな思いを受け止め、地域での生活を支える、「治し、支える」医療が求められています。

年を重ねても健康を維持し、また病気になっても重症化を防ぐことにより、住み慣れた地域で長く暮らすことのできる社会を支えているのは、地域の方々にとって非常に身近な存在である「かかりつけ医」の皆様方です。

現在、新型コロナウイルス感染症という過去に例のない事態に直面している中、地域住民に寄り添い、身近な存在である「かかりつけ医」の重要性がより一層高まっております。

厚生労働省といたしましても、受賞された皆様をはじめ、「かかりつけ医」の皆様を支えるべく、各都道府県と協力しながら、新型コロナウイルス感染症対策を含め地域の医療提供体制の確保及び維持に、引き続き全力を尽くして参ります。

「日本医師会 赤ひげ大賞」を受賞された皆様をはじめ、現在地域の第一線で活躍されている皆様には、引き続きの御理解と御協力を賜りますと幸いです。

最後に、受賞者の皆様が今回の御受賞を契機としてさらに地域において御活躍されることを祈念して、私の挨拶といたします。

羽毛田 信吾 委員

長年にわたって地域に根付いているか、そのためにどのような工夫をしてきたかを基準に選んだ。後進の育成への貢献についても加味したかったが、コロナ禍の状況ではなかなか難しかった。今回は、国の将来のためにもなる母子保健に貢献した医師も選ばれ嬉しい。



向井 千秋 委員

毎回、「現代の赤ひげ先生とはどのような人か」と問いかけながら選考に参加している。コロナ禍の中、多くの住民が今回選ばれた医師を「赤ひげ先生」として頼ったと思う。若い医師たちが手本にすることで、日本の医療を支える人材に育っていくことを期待している。



檀 ふみ 委員

毎回、徹夜して選考資料を読み、どうしたらいいか分からなくなるほど悩むが、今年も“これだけ多くの素晴らしい医師が日本中にいるのだ”と思うと感動する。今年は、経験豊富な99歳の医師や小児科で貢献した女性医師など多彩な受賞者が選ばれ、よかったと思う。



ロバート キャンベル 委員

選考資料を読んでいると、各医師の活動の背景にあるコミュニティが目に浮かんでくる。献身的な地域医療、新技術の発展への貢献という観点で選んだが、この賞を通じ、各地域の医療資源の制約の中がんばる医師がもっと認知されることを願っている。



河合 雅司 委員

さまざまな分野の「赤ひげ先生」によって健康が支えられていることを考えると、選に漏れた医師も含め、私たちは感謝して受診しないといけない。21世紀は感染症の世紀となる可能性があり、かかりつけ医の重要性はますます高まっており、そのような観点で選考に臨んだ。



迫井 正深 委員

初めて選考に臨んだが、小児科の医師や99歳の医師のほか、都市部の医師も含まれ、あらゆる場で地道に取り組む医師が選ばれた。私も医師だが、医療は社会に寄り添い、社会が医療を支えるという本質に沿う素晴らしい賞で、忙しかったが選考に参加できてよかった。



離島で完結する医療と福祉を目指す

礼文町国民健康保険船泊診療所 所長

升田 鉄三

〈北海道〉



(飯田英男撮影)

ますだ・てつぞう 礼文町国民健康保険船泊診療所所長。昭和29年、北海道礼文町生まれ。67歳。同町の奨学金を受け54年に秋田大医学部を卒業。礼文島の医療に貢献しようと同学部第一外科に入局し、関連病院で離島医療に必要な外科の修練を積む。学位取得後の61年に帰島し、現職に就任。35年にわたり島の医療と保健、福祉を支えている。

患者負担軽減のため
最新機器を導入

〚北の最果て、北海道稚内市からフェリーで約2時間。礼文島は島全体が礼文町で、約2400人が暮らす。夏は多くの観光客が訪れるが、厳しい偏西風を受ける冬場はしけでフェリーがしばしば欠航し、島外との往来が難しくなる。

所長を務める礼文町国民健康保険船泊診療所は、フェリー発着場がある中心市街から北へ約20キロ。入院ベッド19床の町立診療所だが、島に病院はなく、あらゆる病気やけがなどに対応しなければならない。

常勤医師1人で休日や夜間も救急患者を診てきた。一刻を争う場合はドクターヘリを、気象条件が悪ければ防災ヘリの出動を要請する。島外への搬送が不可能な状況で緊急開腹手術を決断したこともある。

自身が登場人物のモデルになった海堂尊氏の医療小説でも、離島での緊急開腹手術の場面がある。自分の判断で患者が死亡する可能性が怖くないか、問われた医師はこう答える。

「怖いさ。当たり前だろう、そんなこと」
(朝日文庫「極北ラブソディ」)

船泊診療所への救急搬送は年間60件前後。車とフェリーでの移送は十数件で、空路による搬送も数件ある。ときに人命にかかわる判断を迫られるが、苦労話を自ら語ることはない。

道北をカバーするドクターヘリの基地、旭川赤十字病院の牧野憲一院長は「24時間、住民の健康を守るのは誰にでもできることではない。ITの時代に離島だから遅れているということはない」と高く評価する。

平成14年に完成した現在の診療所は、設備が乏しいという離島医療のイメージを覆す充実ぶりだ。コンピューター断層撮影(CT)や磁気共鳴画像装置(MRI)、内視鏡。大規模病院並みの診断機器



命にかかわる判断に迫られることも

がそろう。

初冬の昼下がり、島外で脳動脈瘤の手術を受けた患者が検査に訪れていた。「ほかの検査結果は問題ない。血圧だけ下が少し高い。薬を出しますので」。穏やかな表情で患者に話しかける。頭痛の訴えを見逃さず、MRIを用いた血管の検査で破裂前に脳動脈瘤を見つけ、専門医につなげたケースは幾人もいる。

病気の早期発見には検査が重要だが、検査のために島を出るのは患者の負担が大きい。診療所で検査ができるよう、最新の診断機器をそろえてきた。腰痛を訴える漁師が多く、その原因となる椎間板ヘルニアや脊柱管狭窄症の的確な診断にもMRIが有用だという。



「やりがいがある」と話す



訪問先で患者と向き合う



訪問診療の途中で



高齢化が進み、通院が困難な患者が少なくない

「常に勉強」

専門治療が必要と判断した患者は島外の病院へ送る。ヘリの出動を要請する際も、最新機器が迅速で的確な診断に役立つ。

「常に勉強し、診断や治療に対応する。専門医がどう治療するのか。患者が島へ戻った後の治療をどうフォローするか。勉強しながら診るという点では大変だが、やりがいがある医療現場だと思う」と語る。

礼文島生まれ。医師を目指したきっかけは小学校の同級生だった夫人の勧めだ。夫人の伯父は島で開業していた外科医で、かつて「礼文島の奇病」と呼ばれたエキノコックス症の研究をしていた。この病気は昭和初期に島で流行し、自身が小学生のころは自衛隊が感染源となる野犬の駆除をしていた。

高校進学のため島を出た。卒業後の進路に悩んでいた時期に夫人の伯父が亡くなり、夫人から

「離島では医師の確保が難しい」と医学部進学を勧められた。

外科医として経験を重ね、昭和61年に島へ戻って所長に就任。帰島前には産婦人科と整形外科の研修も受けた。以来35年、できるかぎり島で治療を続ける地域完結型医療を目指している。

平成11年に人工透析を開始し、患者は透析のために島外へ転居する必要がなくなった。13年に稚内市立病院とテレビ電話で結ぶ精神科の遠隔診療も始めた。15年に救急隊の活動開始と、着実に歩を進めてきた。

近く遠隔診療システムが本格的に稼働し、高度医療を提供する大病院とカルテや画像を共有しながら治療方針を決められるようになる。あらゆる病気に備え、薬の在庫も豊富だ。

「礼文島は医療に関しては恵まれている。急患は超一流の病院にドクターヘリ搬送。救急隊がいるので、24時間いつでもここに搬送される」。長年の実績の結果を、さらりと話す。



大規模病院に匹敵する診断機器がそろった診療所



次男の晃生さん(左)と常勤医師2人体制に

これからは親子2代で支える

週1回、看護師らと車に乗り込み、通院が困難な患者への訪問診療も行う。認知症のお年寄りもいれば、がん患者もいる。

「下痢はどうですか。トイレに自分で行けますか」

「かゆみはどうですか。今日は血液検査をしますからね」

高緯度の礼文島では冬の日暮れが早い。午後3時から約2時間かけて5軒を回ると辺りは暗く、凍てついた道は滑りやすい。自然環境は厳しいが、島で治療を継続できれば、患者は住み慣れた島で生涯を過ごすことができる。

特別養護老人ホームへの訪問診療も。入所者は、治療が必要になれば診療所へ移る。診療所で最期を迎える人もいる。入院治療を終えても、在宅

介護が難しい患者が少なくない。礼文町の高齢化率は36.6% (令和2年1月)と、全国平均の28.4% (同)と比べて高い。

「本来なら在宅介護でも、単身や高齢夫婦だけで介護力のない家庭が多く、医療と福祉を担っている」のが実情だ。診療所では「おなか痛い」

「せきが出て熱っぽい」という軽い症状の患者でも、泊まってもらうこともある。

離島の医師不足は今も全国的な課題だ。島の医療機関はもう一つあるが、入院ベッドのない道立診療所で常勤医師は欠員となっている。だが、船泊診療所には後継者がいる。次男で外科医の晃生さんが島に帰ってきたのだ。昨年8月から常勤医師2人体制に。「大賞に選出されたのは息子が後を継いでくれるおかげ。35歳で独身なのが一番の悩み」。晃生さんの話題に相好を崩した。

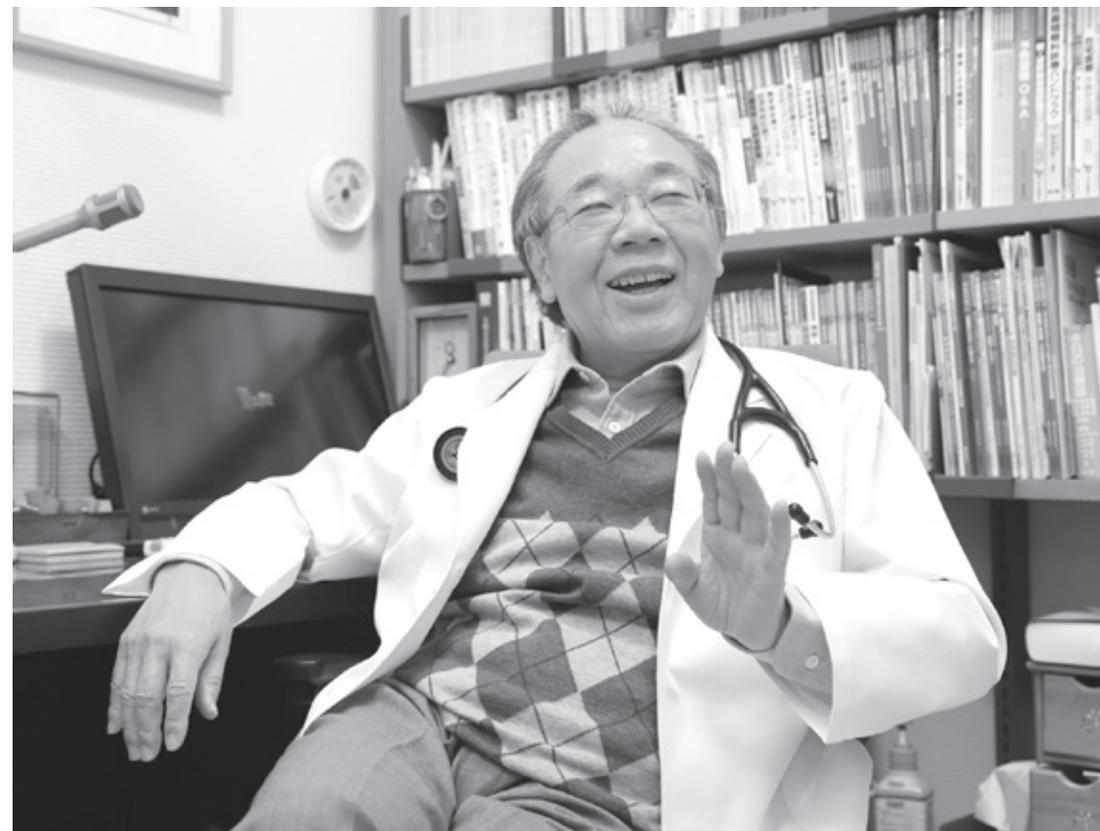
(寺田理恵)

被災地に根差し住民の健康を担う

藤井小児科内科クリニック 院長

藤井 敏司

〈 岩手県 〉



(松本健吾撮影)

ふじいとしじ 藤井小児科内科クリニック院長。岩手県大槌町生まれ、70歳。杏林大学医学部卒。岩手医科大の大学院で小児科を専攻、岩手県立釜石病院小児科を経て、昭和58年4月、故郷の大槌町で開業した。町内でただ1人の小児科医として、町立小中学校で長年にわたり学校医を務め、令和元年度の学校保健及び学校安全表彰の文部科学大臣表彰を受けている。平成8年から20年間にわたり釜石医師会副議長も務めた。

愛称はパンダ先生

三陸沿岸の岩手県大槌町でただ1人の小児科医は昭和58年の開業時から「パンダ先生」の愛称で親しまれてきた。「頼んだわけじゃないんです。看板屋が遊び心でパンダのイラストを看板に入れたんです。当時は体重が75~76kgあった。身長163cmぐらいで、完全なメタボです。体形がマッチングして定着してしまったんですね」と笑う。

大槌町は作家の井上ひさしとのゆかりが深い。小説「吉里吉里人」と同名の吉里吉里の地名があるほか、テレビ人形劇「ひょっこりひょうたん島」のモデルの蓬萊島ほうらいしまもある。平成23年の東日本大震災



「ニーズがある限りやり続けたい」と話す

の津波と火災で市街地が壊滅した。犠牲者は1200人以上、首長が津波の犠牲になった唯一の自治体として知られ、県立病院を含む町内14の医療機関もすべて被災した。

3階建てで九死に一生

病院兼自宅が頑丈な鉄骨3階建てだったおかげでパンダ先生は九死に一生を得た。リアス式海岸が続く大槌町内に平坦な土地は多くない。狭い土地に駐車場を確保するには地上部分の1階を駐車場にするしかなく、2階を病院、3階を自宅にする構造になった。

震災時は自宅の寝室で診療再開前の休息をとっていた。激しい揺れにより廊下の本棚から落下した書物でドアが開かない。何とかこじ開けて自宅の玄関に出たのが午後3時すぎ。倒壊家屋はなかったが、海側に白い煙が見えた気がした。火事だと思って、屋上に上って確認すると、押し寄せる津波の横一線の水煙だった。

院外への避難は不可能だった。2階にいる職員に叫んだ。「津波だ」「すぐに上がれ」「逃げ」。職員3人と屋上に避難した。「水煙が見えたとき、屋上を超えと思った。窓がない屋上のボイラー室に入った。静かになるのを待って、さらにボイラー室の屋根に上った」と当時を振り返る。

津波は3階の自宅の床まで達していた。後に病院兼自宅が流失を免れたのは3階建てにするため耐震性の高い頑丈な鉄骨を用い、1階が駐車場で壁がなく抵抗が少なかったのが大きな理由だったと知る。「3階建てにして大正解だったんですね」とパンダ先生。



町内唯一の小児科医。「パンダ先生」の愛称で親しまれている

避難所で24時間診療

しかし、身動きがとれなかった。山側で発生した火災の炎とガスボンベの爆発音が迫る中で半ば死を覚悟しながら、自宅の仏壇にあったロウソクで看護師らと暖をとりながら眠れぬ夜を明かした。翌朝、病院兼自宅周辺の火災が下火になり、徒歩で山の上の城山公園体育館に避難できた。

待っていたのは被災者の事実上24時間態勢の診療だった。薬も持たずに着の身着のままで避難した被災者が多かった。高血圧症、糖尿病、てんかん癲癇、喘息などの持病の悪化や発作の懸念があった。案の定、被災者の1人が癲癇の発作を起こした。薬もなくけいれん痙攣を繰り返す患者の呼吸状態を管理しながら10人がかりでひたすら抑えつけるしかなかったという。

被災時はウイルス性胃腸炎が流行、避難していた大槌小学校の児童約30人が集団感染した。避難所に詰めていた看護師が集団感染した児童の1人の手を握ってパンパンと叩いて点滴の時に血



診察の前にカルテを確認する



クリニックのスタッフたちと



パンダのイラストが目を引くクリニックの入り口



老若男女問わず診察に訪れる。その多くが顔見知りだ

管を見る仕草をしているのが目に留まった。

「親子だったんです。うちの婦長が気付いて耳打ちしてくれました。点滴が3本しかなくて、お母さんは点滴してほしいけど言えないわけですよ。アピールだったんですね。でも、脱水がひどくて意識も少しもうろうとしていたので打った方がよいだろうと、婦長に指示しました。元気になって帰っていきました」

支給される食糧はラップに包まれたおにぎりが1日1個。この厳しい条件下で事実上の24時間態勢の診療が災害派遣医療チーム (DMAT) の到着まで4、5日は続いた。持病の高血圧症が悪化、盛岡市内の病院に入院することになった。手持ちの薬を飲まずに症状が悪化した高血圧症の被災者に提供していたからだ。

「被災時の医療で最も大事なのは命の危険があるかどうかの判断ができるかどうか。それは経験に基づく勘なんです。検査機器も薬も何もない中で、自分の経験をフル動員するしかない。広く浅く全部を診て診断する小児科の長年の経験が役に立った」と振り返る。

復興を願ってショッピングセンターに診療所

パンダ先生は大槌町内の商店の末っ子で次男。大学受験直前まで一級建築士になって地元に戻って建築事務所を開くのが夢だった。ところが「医学部をやらないか」という高校の同級生の言葉で方



クリニックが入るショッピングセンター

針転換。父親に電話で「これから医学部に変えるけどいい」と駄目元で聞いた。答えは予想外の「いいよ」。

「地元で貢献したい」と岩手医大の大学院では地元になかった小児科を専攻した。開業後は長く地元小中学校の学校医を務め、令和元年度の学校保健及び学校安全表彰の文部科学大臣表彰を受けている。盛岡市内で療養中に聞こえてくるのは診療再開を求める地元の強い要望だった。

その年の5月の連休明けに大槌町内に仮設診療所を開業、インフルエンザが流行していたため隔離室と点滴室を増設、続く手足口病の大流行にも対応、多くの子供たちを救った。その年の12月には復旧した地元の大型ショッピングセンター、シーサイドタウンマストに診療所を再建、被災地の医療を支えてきた。

「マストは10歳上の亡き兄 (藤井征司氏) が初代社長を務めました。被災者の中にはマストが再建しないと大槌に戻らないという人がたくさんいた。ここが復興しないと大槌の復興はないだろうと思って、マストの再建に役立てばと入居を決めました」という。

ニーズがある限りやり続ける

大好きな海釣りでリフレッシュしながら診療を続けるパンダ先生。「小児科が一番自分に合っている。実は岩手医大に入るときは親分肌の教授の『俺のところによこせ、という強い引きもあって小児科を専攻したけど、結果オーライですね。広く浅く全部を診て診断する小児科は自分の頭の構造とも合う』

コロナ禍のこの1年で10^{kg}以上もダイエットした。自らの免疫力を高めるため毎日1時間のウォーキングに取り組んできたからだ。「僕はニーズがある限りやり続けたい」。パンダ先生の決意を引き締まった表情が代弁している。

(石田征広)

24時間365日×30年以上 救急対応に挑む

慈泉堂病院 理事長

鈴木 直文

〈茨城県〉



(酒巻俊介撮影)

すぎき・なおぶみ 慈泉堂病院理事長。昭和28年、福島県塙町生まれ。67歳。聖マリアンナ医科大学大学院を修了し、同大付属病院の勤務を経て、平成元年に大子町に慈泉堂病院を開業。以来32年にわたり、24時間365日、地域医療の窓口として、患者を受け入れている。



東館診療所でも診察する鈴木医師(福島県白川群)

恩師の言葉を胸に日夜診療に励む

茨城県内で最も高齢化が進む山間過疎地域の
大子町。1人暮らしの高齢者が1千人を超えるこの
町で、慈泉堂病院は30年以上にわたり、24時間
365日の救急医療体制を敷いている。

「地域の特殊性を知り、基幹病院との連携を取
れ。疾病とは患者の中に問題があり、患者の中に
解答がある。解らなければ何度でも患者を診ろ。
時間外の患者が本当の患者、時間外の患者を診ず
して誰を診る」。大学病院時代の恩師の言葉を胸
に刻み、同院理事長の鈴木直文医師は日夜診療
に励む。

自宅は病院の敷地内。急患に備えて夕方以降の
予定は立てない。傍らには常に緑のキャップ(帽
子)にマスクと白衣。いつ呼び出されても対応で
きるよう備える鈴木医師は開業してからの32年間
を「本当に仕事をしていただけの思い出せない」

と振り返る。赤い大賞の受賞にも、「もう限界ま
で頑張っているつもりだったが、賞をいただいたこ
とで、もっと頑張らなければいけなくなっていま
った。とても大変なことだなあ」と笑う。

ゆかりのない町で開業

鈴木医師は、大子町の近くにある人口約8千人の
福島県塙町に生まれた。代々医者の家系で、鈴木
医師は「田舎だったので基幹産業はなく、身近で
見られたのは、父の医者の仕事くらいだった」と語
る。医者以外の選択肢が目に映らないまま、鈴木
少年は父の背中を追いかけた。

聖マリアンナ医科大学大学院を修了し、約10年
の同大付属病院勤務を経て、大子町で開業した。
ゆかりのない町だったが、父の強い希望で開業
することになり、鈴木医師の心中は「大学病院で
10年ぼっち働いただけで、人様の診療ができる

のか」と不安を抱えていた。それでも患者第一を胸に、24時間365日、若さの力でがむしゃらに働いた。気づくと人生で一番長い時間を過ごした町になっていた。

年を追うごとに、診療する患者の高齢化は進む。長年見守った患者に見られるのは、毎日の畑仕事で分厚く硬くなった両手、洗っても落ちないほど土が入り込んだ爪や手のしわ、大きく曲がった腰……。こうした高齢患者に、純粹さや素朴さ、頼もしさを感じる。「田舎生活の一部を医療を通して支えたい」。今ではそんな風に思いながら鈴木医師は診療に臨んでいる。



高齢者の訪問診療もかかさず

「神様、仏様、鈴木先生」

常に患者第一の鈴木医師を象徴する出来事が、一昨年10月に台風19号が上陸した際の話だ。大子町は、浸水による死者や、町役場の水没など県内でも極めて甚大な被害を受けた。慈泉堂病院も1階部分が浸水して機能停止。他の病院も同様の被害を受け、町内医療機関はまひしてしまった。

「どんな時でも患者はいる」。災害の中、その一念から鈴木医師は即座に病院再開を目指した。モップ片手に昼夜を問わず率先して院内のヘドロをかきだし、3日後には外来・救急患者の24時間体制受け入れを再開。当時の迅速な対応は今でも「開いてよかった慈泉堂病院」「神様、仏様、鈴木先生」という言葉とともに関係者の間で語り草になっている。

「地域の病院が動いていれば患者さんは安心できる。どんな時でも通常通りであることが重要だ」。鈴木医師は力を込める。

なぜそこまで患者第一の姿勢を貫けるのか。鈴木医師は「昔は医者としての使命感。今では患者への思いやりで体が動いている」と淡々と語る。全てにおいて患者を優先するのは医師として当たり前のことだと言わんばかりだ。慈泉堂病院で働くスタッフにも、患者への思いやりを徹底するよう指導しており、今では鈴木医師不在でも、率先して救急対応に臨んでいるという。患者を思う熱い志は次の世代にも脈々と受け継がれているようだ。

病気の死者ゼロを目指して

現在は新型コロナウイルスの流行という未曾有の災害に直面している。鈴



山あいの過疎地にも通う



自宅で愛犬と



慈泉堂病院(茨城県久慈郡大子町)



熱い志で患者と向き合う。患者が一番の教科書

木医師は「新型コロナウイルス感染症への対策は“点”ではダメ。県医師会と協力して、県全体の“面”で対処しなければならない」と指摘。その中で、地域医療にできることを模索しているという。

普段から一人一人の患者とつながっている地域の病院だからこそ、新型コロナへの正しい対処といった啓発がしやすい。大子町は小さな町で、新型コロナによる風評被害は大きくなりがちだ。正しい知識を患者に説いて、患者さんたちが少しでも安心して暮らせるように努めている。

新型コロナの先を見据えた今後の夢を聞くと、「住民と健康増進について互いにやり取りができる講習会を開きたい」と意気込む。町を歩くと消防署に「火災ゼロ」、警察署では「死亡事故ゼロ」という掲示が目に入る。

「困難だろうし、恥ずかしくてとても大きな声では言えないが、せめて1年だけでも病気の死者を

口を目指したい」と鈴木医師。地域の集会所に住民を集めて、健康習慣に関する講習会を開く。病気を予防する正しい知識を伝えるとともに、住民や患者からも意見を聞いて自身も学ぶ。「患者が一番の教科書。お互いに意見を出し合って健康な日々を作っていきたい」。67歳にしてまだまだ志は高い。病死ゼロという大きな夢に向かい、鈴木医師はこれからも走り続ける。

30年以上仕事だけに没頭してきた鈴木医師に、最近になって小さな趣味が見つかった。「子供のころの小さな夢というか、プラモデルを作ってみたいと思って」と恥ずかしそうに笑う。生活の全てを仕事にささげ、趣味を見つける暇すらなかった鉄人。数十個のプラモデルを“爆買い”したはいいが、いまだにほとんど手付かずのままだという。大子の赤ひげ先生の多忙な日々はまだまだ終わらない。

(永井大輔)



患者との語りも大事な診察だ

99歳現役、進取の気性と飽くなき向上心

伊藤病院 名誉院長

伊藤 博

〈石川県〉



(寺口純平撮影)

いとう・ひろし 伊藤病院名誉院長。医学博士。大正11年、金沢市生まれ。99歳。金沢医科大学附属医学専門部(現・金沢大学医学部)卒業後、陸軍軍医学校を経て金沢陸軍病院勤務。終戦後は国立金沢病院(現・金沢医療センター)内科・研究検査科(細菌学および感染症)に所属、内科医長・研究検査科長を務めた後、昭和39年に同市で伊藤内科を開業、45年には近隣で移転し伊藤病院を開院、平成15年まで院長。現在も名誉院長として週1回の外来を担当する。



患者に優しく話しかけながら診療する

医師になって78年、伊藤病院の院長職は長男の順さんに譲ったものの、現在も週1回の外来診療のみならず、2回の入院患者の回診も担当する。患者さんからは「大先生」と呼ばれ、昭和45年の同病院開業から50年以上通う患者も。その1人である90代の女性は「私の話をよく聞いてくれるので、安心して健康管理をお任せできる」と語る。

医師としての歩みは、戦後の高度成長期を経て、がんをはじめとする生活習慣病の比重が徐々に高まっていった歴史と重なる。

4代続く医師の家系に生まれ「幼いころから医師になるのが当然との気持ちで育った」と振り返る。昭和17年、金沢医科大学附属医学専門部（現・金沢大学医学部）を卒業。同時に陸軍軍医学校に進み卒後、金沢陸軍病院に赴任し約1000人の衛生兵の教育を担当する教育隊長も務めた。

その当時、病院食として、腎臓病、肝臓病、糖尿病などの疾患別の食事を同僚の軍医数人と考案。

それが評判を呼び、他の医療機関にも広がっていった。後日、診療報酬の加算が認められ、現在の医療現場では欠かすことのできないさまざまな種類の病院食の源流になったと思われる。

福井地震で防疫活動

戦後は国立金沢病院（現・金沢医療センター）に勤務して、内科と研究検査科を兼務、後に研究検査科長となった。その時代に大きな経験をしたのが、東日本大震災、阪神大震災に次ぐ戦後3番目の大きな被害となった福井地震（昭和23年6月28日、死者数約3800人）の際の防疫活動だ。

発生後すぐに同僚らと救護隊を結成し、翌日に震源の福井県丸岡町（現・坂井市）に入り活動を開始。医学生時代から細菌学・感染症に取り組んで来た経験を生かし、「各避難所などに出向いて腸チフスなどのワクチン接種や井戸の消毒をひたすら



金沢市の保健事業にも貢献



「金沢総合健康センター開所式」パネル。センターの開設と運営には深くかかわった



犀川のほとりに建つ伊藤病院



患者の話にもよく耳を傾け、コミュニケーションを欠かさない

行った」と振り返る。それらの結果、現地での腸チフスや赤痢等の蔓延をほぼ完全に押さえ込むことに成功、衛生状態が現在ほど良くなり、井戸水を飲用に使うなどの理由から保菌者が多かった当時としては画期的な成果だった。

胃カメラ普及に尽力

昭和20年代の終盤からは、胃がんの早期診断に威力を発揮する胃カメラの普及に尽力する。きっかけは、当時のレントゲンで胃がんの診断を行い、患者を外科に紹介して手術に立ち会うたびに「摘



北陸地方での普及に尽力した胃カメラを手にする

出された胃を見ると、術前の診断と合っていないことが少なくなく、「これで医者といえるのか」と自責の念にかられたことだった」という。

そこで、東大病院など国内で2、3カ所しか胃カメラが導入されていない28年に東大の田坂内科8研へ視察に赴き、29年、北陸地方で初となる胃カメラの臨床応用を国立金沢病院で開始。34年に日本消化器内視鏡学会の前身である日本胃カメラ学会が設立されたので35年には代表世話人として全国に先がけて胃カメラ学会北陸地方会を発足させ、北陸全域での普及に尽力した。「初期のころは、私のところで研修を受けてからでないと胃カメラを販売してもらえないということもあった」と述懐する。

かつては部位別のがん死亡率（年齢調整済み）でトップだった胃がんだが、その後の胃内視鏡検査の普及により減少の一助となったと評価されている。自身が39年に伊藤内科を開業した際も、北陸で初となるX線テレビ室、内視鏡室、臨床検査室を設置するなど、当時としては最先端の施設づくりを行った。

53年からは金沢市医師会の理事となり、救急医療体制の確保と充実に奔走する。当時、地域に夜間急病センターがなく、その設置をめぐる「話が出ては消え…と長い間の懸案だった」。そんな中、それまでの地域への貢献によって行政から厚い信頼を受けていた伊藤氏の熱心な取り組みにより、スムーズに予算措置もなされ、55年の財団法人「金沢総合健康センター」設立、休日夜間急病診療所開設へと結びついた。

文化の薫り高い土地柄、自身の患者に文化勲章受章者や人間国宝の工芸家がいたことなどの影響から美術鑑



父の志を受け継ぎ病院長を務める長男の順さん(右)

賞が趣味の伊藤氏だが、「総合健康センターが設立された際は、建物内の各部屋が殺風景だったので、自宅から何点か絵画、花瓶などを持っていったことで当時の金沢市長から特別の感謝状を戴いたのもいい思い出」と語る。

大切な「5カ条」

伊藤氏が長年、「かかりつけ医の大切な仕事」として自身で守り、後進にも伝えてきた5カ条がある。①感染症への適切な対応②がんの早期発見③さまざまな生活習慣病に対する適切な取り組み④認知症への適切な対応⑤高齢者を守るため、生活機能を維持して健康寿命を延ばす——だ。感染症の専門家として、新型コロナウイルスの感染拡大の以前から、第1条に感染症を挙げていたことは注目に値する。コロナ禍でのかかりつけ医の役割に

ついては「コロナの影響で健康診断の受診率が下がり、疾患の早期発見に結び付きにくくなっている中、その点に細心の注意を払うことが大きな使命」と言い切る。

長男で現・伊藤病院院長の順さんは父親について「鉄人」と評する。体力や気力だけでなく、内視鏡の普及に心血を注いだ後は「糖尿病との闘いや超音波診断が重要となる時代が来る、といて学会や研究会に勉強に出かけていくなど、新しいものにどんどん挑戦する強さがある」という。実際、白寿となった現在も定期的に大学の専門医を招き、画像診断の検討を行うなど、向上心は衰えない。

「父の背中を見て育った」という順さんだけでなく、次男の透さんも現在、金沢医科大学病院長を務める。さらに7代目となる孫の理佳さんも医師の道を歩むなど、その志は確実に受け継がれている。

(山本雅人)

運命に導かれ、地域の子供の健康守り続け

おきのがみ
沖野上クリニック 院長

梶尾 直美

〈 広島県 〉



(島津英昌撮影)

かじお・なおみ 沖野上クリニック院長。昭和10年、広島県東広島市生まれ。85歳。広島大学医学部卒業後、同大医学部附属病院第一内科入局。広島記念病院内科を経て、福山市の大日方小児科医院勤務。55年に泌尿器科医師の夫・克彦氏(故人)と同市で梶尾医院開業。平成18年、新築移転し名称を福山泌尿器病院に変更、副院長に。30年、法人合併に伴い沖野上クリニックに改組、院長となる。

広島県の最東部に位置し岡山県と隣接する福山市。そもそも医師になったのも、気候の穏やかな人口46万人のこの地で医師を務めるのも、そして小児科診療に携わるようになったのも、偶然でもあり、運命でもあると、いい。

母の事故がきっかけ

広島市の隣の東広島市に生まれ、子供のころは里山を駆けめぐるなど自然の中で育ち、医師になるとは考えてもみなかった。「母子家庭だったので、栄養士になって一刻も早く家計を助けたいと思っていた」というが、高校3年の夏休み、母親が農作業中にマムシに手の指の一部をかまれ、壊死するという事故に見舞われる。

大学病院に搬送された母親は、^{だいたい}大腿部の組織を指に移植することになった。そこで目にしたのが有茎植皮の手術。採取する大腿部の組織を切り離さずに血流を温存したまま、手の指の方を大腿部に付けて縫合、しばらくたって移植部位からの血流が開通したら切り離すことで欠損部位が再建されるというものだった。

「魔法のような治療のすばらしさと、医師の姿をまぶしく感じた」といい、医師になると決めた。

病室で母親に付き添いながら入試問題を取り寄せ、医局に押し掛け主治医に直談判して勉強を教えてもらうなど、怖いもの知らずの度胸と猛勉強の末、当時の広島大学の医学部進学課程に現役合格。39人の合格者中、女性は1人で、2年後に医学部へ進学できたのは13人だった。

卒業後の昭和35年に、大学の同級生で泌尿器科医の克彦氏と結婚。長男も生まれたが、女性の医師が少なかった当時、「預かってくれるところも



診察の最初は「今日の体調はいかが」と尋ねるところから

なかったで、当直の際に生まれたばかりの長男を連れていき、当直室で一緒に寝た」と語る。当直室の電話が鳴ると息子が先に目を覚まして激しく泣き、患者さんを診て戻ってみると、泣き過ぎで嘔吐おうとしていることもあったという。

3足のわらじに苦勞

夫の克彦氏は39年に国立福山病院(現・福山医療センター)の泌尿器科医長となり、広島市から約100キロ離れた福山市へ。当初は「後任が見つかるまでの短期間」といわれていたものの後任がなかなか見つからなかったため、夫のいる福山へ、梶尾氏の方が行くことになった。



身軽に自ら事務室へ



沖野上クリニックの医師、スタッフと共に

内科医のほかに家事、子育てと“3足のわらじ”で苦勞していた梶尾氏は「福山へ行くのを機に専業主婦となり、医師は辞めるつもりでいた」。その際、当時の上司から「福山のいい先生を紹介するから会ってみなさい。内科でなく小児科だけど…」と勧められたのが大日方小児科の院長だった大日方一政氏だった。

大日方氏は会うなり「どうしてやめる！ 子守りを探してあげるからうちに来なさい」と一言、大日方小児科医院に勤務することになった。「あの先生がいなければ医師を続けることもなかったし、小児科医になることもなかった」（梶尾氏）。大日

方氏は小児科に関するあらゆる知識や経験について、診療が終わった後にもわざわざ時間を作って教えてくれた。

子供たちを診るようになって、すぐに小児科の魅力に気づく。それは「子供のめざましい回復力、そして何よりもその純粋さにひかれた」という。

毎日多くの子供を診たが、特に印象に残っているのはケトン性低血糖症の幼児。数カ月に1度症状が出て、顔色は青白く、ぐったりとなって来院するのだが「点滴をすれば症状が改善するのが自分でも分かっている、嫌なのをがまんして毎回、泣きながら腕を差し出すのが何ともけなげだった」。点滴後に症状が改善すると、いつも「ありがとう」と言ってくれたことは忘れられない思い出で、「その後は元気に成長して、今はいいお父さんになっている」と教えてくれた。

85歳、夜間診療に協力

55年、夫とともに梶尾医院を開業。有床で、外来もピーク時には1日300人が受診することもあり、「夜も昼もなく、ちゃんと食事をした記憶がないくらい」と振り返る。例えば、はしかの子供などは症状が刻一刻と変化し、保護者の不安についてもよく理解できるので、夜間でも電話が鳴ればすぐに対応、このようなことが毎日続いた。

平成12年に同市医師会が365日無休の夜間小児診療所を開設すると協力医となり、以来20年、85歳となった昨夏まで、自らのクリニックでの診療後、午後7～11時の当番に定期的に入っていた。「夜間小児診療所の開設により、毎夜の電話のプレッシャーから解放されありがたい」と感謝の気持ちで務めている。このほか、市の3歳児健診など



前身の梶尾医院から数えて、ここ沖野上で40年診療をしてきた

も毎回手掛けている。

現在、沖野上クリニック（内科、小児科、泌尿器科、皮膚科、脳神経内科）の院長として、内科と小児科の診療を担当する。複数の疾患があるため2つ以上の医療機関を回る必要があるにもかかわらず、体力面で厳しい高齢者も多い。「泌尿器科の患者さんでそのような方が多いので、可能な限り、うちだけで済むように対応するのが医師としての務め」と言い聞かせ、日々の診療にあたっている。

大日方小児科医院、梶尾医院の時代に担当した子供が成長して大人となり、その子、孫を診療する機会も多い。医師となって60年、「人とのいい出会いが自分の運命を決定づけてきた」と振り返る。今後は「つかえ棒によって、もう一方が支えられる『人』という漢字のごとく、お互いが支え合うのが人間」とし「これまでの恩返しとして、体力の続く限り、医師として誰かの支えになれば」と語った。

(山本雅人)



「親子2代で患者さん」と共に記念撮影



新しい機器も、まずは自分で



恩師のことは「患者さんは教科書だ」を今日も胸にして

赤ひげ功労賞 受賞者

(順列は北から)



大竹 進

青森県 大竹整形外科、さいクリニック 院長



小川 郁男

埼玉県 鶴ヶ島耳鼻咽喉科診療所 院長



星野 恭子

東京都 瀬川記念小児神経学クリニック 理事長



廣瀬 憲一

神奈川県 広瀬病院 理事長



月花 亮

静岡県 キブネ眼科医院 前院長



石居 志郎

京都府 いいしい医院 管理者



宮下 弘道

大阪府 宮下内科 院長



石関 光朗

和歌山県 近野診療所 所長



大和 秀夫

徳島県 大和外科医院 院長



亀井 敏光

愛媛県 友愛医院 院長



岸本 範男

高知県 岸本内科 院長



竹ノ内 弘昌

福岡県 福田眼科病院



名嘉 勝男

沖縄県 西崎病院 理事長



日本医師会 常任理事

城守 国斗

第9回「日本医師会 赤ひげ大賞」は、昨年5月29日、日本医師会より都道府県医師会宛てに推薦依頼文書を発出し、8月31日をもって締め切らせていただきました。

選考に当たりましては、10名の選考委員で「候補者推薦書」による事前審査を行い、その結果を基に、11月12日、日本医師会館で選考会を開催し、「赤ひげ大賞」受賞者5名ならびに「赤ひげ功労賞」受賞者13名を決定し、その後、令和3年1月6日に、今回の結果を公表しました。

受賞された先生方は、長年にわたり、地域住民の健康確保に親身に取り組んでこられ、まさに医療でまちづくりを実践する現代の赤ひげ先生と言えます。

新型コロナウイルス感染症による未曾有の危機の中では、健康の不安を何でも相談できるかかりつけ医の重要性が増すばかりでなく、地域医療に従事する先生方に対する国民の期待もますます高まるものと思います。

本賞の受賞が、各地域の先生方の励みとなり、地域医療の更なる充実へとつながることを願っております。

日本医師会 赤ひげ大賞

- 主催** 日本医師会、産経新聞社
- 後援** 厚生労働省、フジテレビジョン、BSフジ
- 協力** 都道府県医師会
- 特別協賛** 太陽生命保険株式会社
- 対象者** 病を診るだけでなく、地域に根付き、その地域のかかりつけ医として、生命の誕生から看取りまで、さまざまな場面で住民の疾病予防や健康の保持増進に努めている医師。日本医師会及び都道府県医師会の会員で現役の医師（ただし、現職の日本医師会・都道府県医師会役員は除く）。
- 推薦方法** 本賞受賞にふさわしいと思われる方1名を各都道府県医師会会長が推薦
- 受賞発表** 産経新聞紙上
- 選考** 日本医師会と産経新聞社の主催者側委員に第三者を交えた選考委員会において選定
- 賞状と副賞** 賞状、記念盾及び賞金等

保険もWithコロナの時代へ。



新型コロナ^{※1}の入院で最高 **40万円**^{※2}

新型コロナウイルスという“予測ができない”不安に、保険で応えていくため。

太陽生命は、かつてないスピードで世界が変わる今こそ、安心と確かさをみなさまにお届けしていきます。

新発売

感染症 **プラス**

入院一時金保険^{※4}

※1「新型コロナ」とは、新型コロナウイルス感染症を指定感染症として定める等の政令（令和2年政令第11号）に定める新型コロナウイルス感染症のことをいいます。将来、感染症予防法等の改正により保障対象外となることがあります。

※2入院一時金保険と感染症プラス入院一時金保険をそれぞれ入院一時金額20万円で付加し、所定の感染症を原因とした入院の場合、感染症プラス入院一時金保険は、新型コロナウイルス感染症等、所定の感染症を保障します。

※3「保障が2倍」とは、入院一時金の受取額が入院一時金保険のみに加入したときとくらべて2倍になることを指します。

※4感染症プラス入院一時金保険は、災害入院一時金保険の愛称であり、保険組曲Bestの指定保険の一つです。商品詳細は、ご契約のしおり・約款等をご覧ください。責任開始日から10日以内に発病した所定の感染症は支払い対象外です。

[資料のご請求・お問い合わせは] 太陽生命お客様サービスセンター

営業時間：月～金 9時～18時/土・日 9時～17時 ※祝日・年末年始(12/30～1/4)は休業します

0120-95-1528 (通話無料)



スマホ保険



さあ、保険の新たな元へ。

T&D 保険グループ

 **太陽生命**